

特別支援教育導入時における中学校教師の意識に関する研究
～ 校内研修の実践を通して ～

学校教育専攻
教育臨床コース
西野 孝

指導教員 今田 雄三

1. 問題と目的

ここ数年の間に特別支援教育という名のもとに、軽度発達障害を持った生徒に対する正しい理解と具体的な支援の方法が示されるようになってきた。

しかし、筆者の勤務校やその地域の中学校において、筆者を含め教員が発達障害についての理解を正しく行っているとはいえない状態であった。ADHDと思われる授業に集中できない生徒を「がまんしなさい」と職員室で長時間にわたり厳しく指導する。LDと思われる生徒に対しては「家庭での勉強不足が理由で小学校の内容でつまづいている」と決め付ける。高機能自閉症やアスペルガー障害と思われる生徒に対しては「みんなと仲良くしようとしないう変わった子」という見方をする。以上のように知識不足のために誤った指導を行ったり、教師の指導の域を越えていると見がちであった。

本研究では、本格的に特別支援教育が始まる前のA市の小中学校における校内コーディネーターの現状と、どのような特別支援教育に関する校内研修が必要とされているのかを調査し、効果的な校内研修を開発し、行うことを第1の目的としている。

さらに、著者の勤務するA市立B中学校で軽度発達障害の状態を持つ生徒にかかわる教師が彼らをどのように意識し、実際にどのような支援がなされているのかを調査することで、本格

的な特別支援教育の実施に寄与したいと考えている。

2. 方法

本研究は、次のような内容により構成されている。

- (1) A市立小中学校の校内推進教員の意識、校内研修の実施状況の調査 (2005年3月2日発送3月25日〆切: アンケート①)
- (2) A市立B中学校第3学年在籍生徒の軽度発達障害の状態を示す生徒の実態調査 (2005年6月6日～10日)
- (3) A市立B中学校第3学年会議での事例検討・具体的な支援の検討 (2005年6月10日 16:30～17:30: アンケート②)
- (4) A市立B中学校第3学年の教員に対する面接(半構造化面接) (2005年度夏期休業中(30分程度))
- (5) A市立B中学校夏季現職教育による校内研修 (2005年8月19日 9:30～12:00: アンケート③)
- (6) A市立B中学校教員の校内研修2ヶ月後の変化に関する調査 (2005年10月16日: アンケート④)

まず、実践前にA市立小・中学校の特別支援教育校内推進教員の特別支援教育に対する意識、

校内研修の実施状況に関するアンケート調査を行った。小学校 52 校、中学校 18 校の合計 70 校が対象である（1）。

次に、A市立B中学校第3学年の筆者の担当教科の授業にティームティーチングの形で通常学級の5学級に1週間入り、生徒190名を対象に授業中の行動観察を行うとともに学年の教師から情報をもらって軽度発達障害の状態を示す生徒の実態調査を行う（2）。

その結果を実態調査の最終日にA市立B中学校第3学年の教員9名を対象に学年会議で報告するとともに、事例研究会を行った（3）。

そのとき参加した第3学年の教員のうち6名に1ヵ月後に聞き取り調査を行った（4）。

さらに、A市立B中学校全教員24名を対象に夏季現職教育において校内研修を行い事後のアンケートを行う（5）とともに、2ヵ月後にその後の変化を調査する目的でアンケート調査を行った（6）。

3. 結果と考察

1. A市では小中学校ともに、障害児学級の担任が校内コーディネーターを兼務していることが多い。特に中学校ではその傾向が強い。しかし、障害児学級の担任の職務は校内コーディネーターをしたからといって軽減できるものではなく、結果的にコーディネーターとしての役割を十分に果たすことができない場合が多い。また、特別支援教育を行うのはすべての教師であるというように意識改革を行う必要があり、障害児学級の担任だけに頼るのは望ましくない。

2. 昨年度A市の小中学校で行われた校内研修の回数で最も多かったのは小学校で2回、中学校では0回であった。このことから、小中学

校における取り組みの差がはっきり表れ、中学校での取り組みの遅れが顕著であった。

3. 校内研修では、一般論としての「軽度発達障害の知識」「具体的な支援の方法」に加え、特定の生徒に関する「校内の事例研究」が重要であると思われるということがわかった。

4. 校内の事例研究において、KJ法を用いたワークショップ型事例研究会は有効であった。また、1度経験することにより、次回からは誰でもファシリテーターになることができ、参加者も回を重ねるほうが短時間で内容のある検討ができると感じていた。

5. 聞き取り調査やアンケートでの自由記述のなかで特別支援教育が始まったら医療との連携はどのようにするのか、本人や周囲の生徒に対し、障害のことをどのように理解させればよいのかといった疑問がでてきた。このような疑問に対して丁寧に答えていく必要がある。

6. 軽度発達障害の状態を示す生徒の支援として、個別にかかわることとともに学級作りの中で周囲の生徒の理解を促すことが重要であることがわかった。

4. おわりに

この研究を行なったことにより特別支援教育に関することを様々な角度から考えることができた。この研究が特別支援教育を進める上で少しでも役に立てばと願うとともに、著者自身が現場に戻った後、この研究を通して学んだことを生かして特別支援教育の充実に貢献したいと思う。